東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

たくさんの方に支えられた修学旅行

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河江,邦教 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00174066

たくさんの方に支えられた修学旅行

前カラカス日本人学校　教諭
北海道河東郡鹿追町立笹川小学校　教諭　河　江　邦　教

キーワード：修学旅行、JICA、現地理解、国際交流

1．はじめに

ベネズエラ・ボリバル共和国は南米大陸の北部に位置し、北はカリブ海に面し、東はガイアナ、南はブラジル、西はコロンビアと国境を接している。国土の広さは日本の約2.4倍で人口は約2800万人である。首都カラカスは、カリブ海から直線距離で約15kmの所にあり、ベネズエラ北部の東西ほぼ中央部に位置している。気候は、一般に雨季（4~10月）と乾季（11~3月）に分かれており、年間平均気温は20~25℃で、湿度が低いので年間を通して過ごしやすい。しかし、治安については多くの問題を抱えており、政情は不安定である。現在、外務省からカラカス首都区に注意喚起が発令されており、「渡航の是非を検討してください」という勧告がされている。また、物価についてもインフレが年々進んでおり、価格が高騰している。

私は3年間のカラカス日本人学校勤務において3度修学旅行に行く機会に恵まれた。ベネズエラは、南米の中でも治安の悪い国の1つである。また、交通機関の遅延など何が起こるかわからない場所である。カラカス日本人学校の教育活動もこれらの治安の問題に大きく影響を受けている。そこで、たくさん方に支えられ実施できた修学旅行について紹介する。

2．本校修学旅行の実施状況

本校では、小学部5年生から中学部3年生までを対象に2泊3日で修学旅行を実施している。平成24年度、25年度は上記の条件で行った。しかし、平成26年度、児童数減少から対象学年を小学部4年生まで引き下げ、小学部3年生は保護者の承諾があれば参加できるようにした。また、近年の国内の治安情勢の悪化から、事前に大使館の安全担当領事から情報を得て、旅行地の選定を行っている。

平成24年度

赴任後、修学旅行の下見を4月下旬までに行かなければならないと引き継ぎ文書があった。しかし、本校は、4名の教諭すべてが変わり、ベネズエラのこと、生活のことに関して右も左もわからない状況であったため、4月の下見は不可能であった。

5月上旬に日系人会代表にメールをしてプエルトオルダス方面に修学旅行に行く旨を説明し、日系人会の情報を得た。そこで、在住の日本人を紹介して頂いた。その方の紹介で、グリダムを整備している日立の方、シドール（鉄鉱石関係）で働いている方に見学のお願いをした。どの方も快く引き受けてくだった。

グリダムは、世界3位の規模を誇る水力発電施設である。発電するための機械は、日立製のものを使用していた。（2012年時点）そこで、保守管理をしているのが日立である。発電施設は、政府にとって重要な施設のため、普段は一般の人の立ち入りが制限されている。しかし、グリダムは日本の企業が整備を担っていること、日本人学校であることなどから施設内を見学することができた。デルタデオリノコツアーでは、世界に3か所しかいない

カワイルカを見ることができた。カワイルカは、ベネズエラの２ボリ札にもなっている。オリノコ川では、ピラニア釣りも体験することができ、生肉を釣り針に付けて垂らし、釣りをすることに、南米にいると実感が湧いた。また、川原ではカピバラの生肉販売の様子を目の当たりにした。あいにくの雨だったが、子ども達は船上で生肉を釣り針に付けて糸を垂らし、何度も餌を食いちぎられながら釣りを楽しんだ。残り時間あと５分という時に、ピラニアを釣り上げることができ、歓声を上げていた。

平成25年度

国内第２の都市マラカイボを中心に計画を立てていた。そこで、大使館と相談し、ベネズエラの都市部では治安面の心配・不安が残ると回答をもらった。そこで、校内で検討し、国外を選択した。航空便の遅れ・欠航が頻発するベネズエラ。行き先選びにも一苦労であった。出発時刻も問題なく、便数も比較的多いパナマを選定先にした。パナマでは、日本人ガイドのもと、専用車で移動し３日間観光した。パナマ到着後、ホテルへ直行し、チェックイン。周辺を散策した。建物に柵がない、落書きが少ない、クラクションの音が少ない等、同じ中南米だが国によって様々な違いのあることに気づかされた。子ども達が、ガイドさんと「建物の入り口に柵がない」などと会話をしている中で、パナマとベネズエラの治安・経済についていろいろと考えていた。

パナマ運河見学当日、残念ながら午前中は小雨であった。はじめに、併設されている運河博物館に行った。博物館では、日本人青山氏の活躍など英語・スペイン語で書いていたものをガイドが分かりやすく話してくれた。しかし、この日は午前中、船の通過がなく、午後２時頃行くと大型船が通過するとの情報をもとに午後から再び見学するようにガイドに調整してもらった。日本人ガイドだと調整がスムーズに行うことができ、とても助かった。また、お土産店で児童生徒がパナマと日本の国旗をモチーフにしたピンバッジを探していたが、なかなか見当たらず困っていた様子を見て、手配してくれた。パナマの名物料理「サンコーチョスープ」に舌鼓を打ちながら、パナマの経済の様子などガイドから詳しく話を聞くことができた。社会科で貿易などについて学習しているため、ある程度理解が進み、積極的に質問している様子を見ることができた。

ベネズエラで生活しているからこそ、近隣の中南米の様子を見て比べることができたと実感している。パナマ日本人学校との交流などいろいろと模索したが、カラカスの空港の治安を考慮した結果、１日目が昼間のフライト、３日目が早朝のフライトでカラカスに昼間到着便となった。自由に動けるのは、２日目だけとなった。修学旅行で何を学ばせたいかを一番に考え、優先したものがパナマ運河見学であった。

平成26年度

修学旅行の実施についての議論から始めた。なぜなら、対象学年児童が１名だったからだ。年齢を引き下げての実施か、実施しないか。検討の上、年齢を引き下げての実施となった。また、クラス単位で動けるように小学部３年生も保護者の承諾を得られた場合のみ参加を可能とする条件も付けた。その後、行き先の検討に入った。国内候補地は、２月の学生デモ以降治安の悪化を辿っていた。今年度は、対象児童の年齢から考えても近距離の移動が最善と考え、大使館と相談し、校内で検討した結果、国内有数のリゾート地であり、観光地であるマルガリータ島とした。さらに、マルガリータ島にはJICA（Japan International Cooperation Agency）隊員がいることから、JICAカラカス支部と連絡をとり、治安状況の他、修学旅行時の現地でのアテンドの協力をお願いした。すると、快く引き受けてくださった。

活動地は、島の西部の小さな漁村。その漁村を中心としたプランを隊員の方と相談しながら立てた。現地の学校訪問、村長宅での昼食、海洋博物館見学、マングローブ林ツアーと多彩なものとなった。村長宅での昼食は、隊員がエコツーリズム活動をしている拠点であった。今後は、修学旅行のような観光客を受け入れながら現金収入を増やしていきたいと計画していたそうだ。その矢先の修学旅行の話であったようで、我々が初めての受け入れとなった。

海洋博物館に立ち寄った際、亀などの海洋生物、またサンゴのはく製などを見ることができた。海洋博物館で

もJICA隊員の友人が務めている関係で、特別料金さらにガイド付きで館内を詳しく説明してくれた。現地校との交流では、自己紹介のあと、お土産（けん玉、ドッジボール、バスケットボールなど）を渡した。現地にもペリノーラ（けん玉）はあるが、形の違いに驚いていた子どもが遊び方の見本を見せると、「オーッ！」と歓声が上がった。その後、校庭でのキックベースボール大会となった。チーム分けや審判などを現地校の先生がすべて行ってくれた。日照条件等厳しいことから、屋根付きの運動場であった。15名でキックベース大会が開かれた。子ども達は、とにかく笑顔だった。たくさんの好プレー・珍プレーが出た。ホームランも飛び出し、ハイタッチ・ガッツポーズ、子ども達に国境・言葉の違いなど関係なかった。この様子について、JICA隊員が活動報告ブログ（World Reporter）に紹介してくれた。村長宅に移動し、マルガリータ島ならではの昼食（魚料理）となった。現地で食べられている巨大サイズのアレパ（ベネズエラの主食の一種。とうもろこし粉を原料に作られているもの）を目にした子ども達は興奮気味に食べていた。同じベネズエラでもアレパの大きさ・食べ方に違いがあることを初めて知った。

3. 子ども達の変容

3回の修学旅行とも「自分のことは自分でする場を設ける」ことをねらいとした。荷物の準備から、旅行先での買い物の価格交渉、宿泊中の生活など自分でできることは基本的に自分でやるように指導した。

また、3回の修学旅行とも、実施前に「スペイン語」の授業において、買い物で必要な言葉や困った時の言葉などを学習した。お土産屋では、値切り交渉までする様子も見ることができた。カラカスでは、治安の関係上、子どもがお金を持って買い物をすることはなかなかできない状況がある。しかし、旅行先ではカラカスほど治安が悪くないのでそういったことも可能であった。教育課程と連携し、ある程度語学力を上げて修学旅行に臨むことで、現地の人と会話し、「通じる」という喜びを味わうことができた。

ねらいを明確に子ども達に提示することで、修学旅行前から忘れ物が減る傾向にあった。そして、終了後には忘れ物をしないといった子どもも出た。ねらいを子ども達に伝え、実践することで生活習慣に大きな変化が見られるようになると感じた。

4. 終わりに

1年目は、日系人会。2年目は、パナマの旅行社。3年目は、JICA隊員。

3回の修学旅行でいろいろな方に支えられて実施することができた。年によってそれぞれだが、たくさんの方との出会いがあった。1年目は、日系人会なしには修学旅行は実施できなかった。お願いすると、人脈が広がっていき、日系人ネットワークの強さを感じた。また、見学先などでいろいろと融通をきかせてくれ、現地の人との信頼関係があるからこそできたと感じた。

3年目は、JICA隊員の日頃から活動している拠点を中心に見学内容を構成させてもらった。現地の方がとても親切で気さくに対応してくれたこと、キックベース大会にもたくさんの観客が訪れ応援してくれたことなど、村人たちの歓迎ぶりは、日頃から活動している隊員さんが築いている信頼関係が確固たるものであることを実感した。だからこそ、外部から来た私たち（日本人学校修学旅行生）を歓迎してくれ、交流や食事などすべてうまくできたと感じている。

日本では、旅行社と担当教員で作り上げる修学旅行。しかし、海外では日系人会やJICA、日系企業、在住する日本人の様々な支援によって充実したものへと仕上げていく過程がある。この過程の中で知り合った方々に心か

らお礼申し上げたい。また、「何が起きるかわからない中南米」を意識しながら、常に危機管理意識をもって計画から実施へと進めていかなければならいことをいろいろな方から教えて頂いた。

海外で知り合うことに縁を感じつつ、今後もカラカス日本人学校への支援をお願いしていきたいと思う。